

三条市鳥獣被害対策マニュアル

サル・クマ被害対策の 基礎知識

はじめに

近年、全国的にクマやサルなどの野生動物による農作物等の食害や人身事故が多発しています。三条市でも下田地域を中心にクマの目撃情報やサルによる農作物の食害が増加しています。

これらの鳥獣被害増加の背景には我々人間の生活様式が変化したことや自分の住んでいる地域への無関心等があります。鳥獣被害を解決するためには行政だけではなく、集落単位・個人単位での継続的な対策が不可欠です。

本マニュアルでは、ツキノワグマとニホンザルについての集落・個人単位で実行可能な対策、三条市(主に下田地域)の状況や生態を紹介します。



サルの食害に遭ったネギ

対策の心構え

- 住民一人一人が当事者意識を持つ
- 相手の情報を集める(生態、侵入経路、個体数等)
- 地域での連携・意識の共有
- 隠れる場所を無くす(農地周辺・雑木林の下刈り等)
- 餌場を提供しない(放棄果樹、ゴミの管理等)
- 複数の対策を同時に行い、慣れを防止する
- 追い払いはできるだけ大勢で行う

原因

なぜ鳥獣被害が起こるようになったのか

我々人間の生活様式の変化で、自然への関わり方はこの数十年で大きく変化してきました。例えば、雑木林の利用の減少、人工林の管理不足、耕作放棄地の増加などがあります。これらの条件が複雑に絡み合っただけで野生動物による被害が増加していると考えられます。

●雑木林の利用の減少

かつては燃料としての薪や肥料となる落ち葉などを集めるため、人間が雑木林に適度に入ることによって「明るい」雑木林が保たれてきました。そして、このような「明るい」雑木林は野生動物の生息地と人間の生活圏の間の緩衝帯として役割を果たしてきました。

しかし近年、化石燃料や化学肥料の普及により雑木林に人の手が入らなくなると、下草などが繁茂し「暗い」雑木林になってしまい緩衝帯としての役割を発揮できず、本来人間を恐れて人里に近づけない野生動物が身を隠せるようになったことで、人里のすぐ近くで生活するようになりました。

●人工林の管理不足

戦後、日本では木材供給のためにブナやナラ類など野生動物の餌の実をつける広葉樹を伐採し、木材用に植林されたスギやヒノキだけの単純な人工林が広範囲に作られてきました。

その後、海外の安い木材が輸入され国産の木材の需要が少なくなると、枝打ちや下刈りなどの管理が行き届かず、その多くが見通しの悪い「暗い」人工林になっています。

一方、1970年代までは狩猟などで個体数を減らしていた野生動物は、その後ハンターの減少などにより徐々に個体数が増加してきました。増加した野生動物は、餌の実をつける広葉樹の減少などによって山林での餌の確保が困難になり、餌を求めて人里に下りてくるようになりました。

●耕作放棄地の増加

近年増えている耕作放棄地では柿や栗などの果樹類がそのまま放置され、人が入らなくなったことで野生動物の餌場になっています。野生動物にとって人間の残した果樹類は自然界の餌よりも利用しやすく、結果として個体数の増加につながっています。

さらに、耕作放棄地や道路沿いのススキなど背の高い植物が茂り藪になると野生動物の行き来が活発になり、人里への侵入ルートになっています。



国道沿いに野生動物がつくった獣道

対策

鳥獣被害に強い集落づくり

クマ、サルに限らず鳥獣被害を防ぐ対策は共通したものが多く、集落を「餌場と認識させない」ことが重要であり、「餌の量を減らす」、「リスクの増加」で野生動物が嫌がる対策が必要です。

●餌の量を減らす

野生動物が人里に下りてくる一番の目的は餌の確保です。集落を餌場にしないためには、

1 生ゴミや野菜くずなどを放置しない

- ・野菜くずは土に埋める
- ・堆肥を作るときは地面に固定した蓋付きの堆肥化容器に生ゴミを入れる

2 果樹や果実の適切な管理

- ・柿や栗などの果実は適切に処分する(早めの収穫や土に埋める等)
- ・利用しない果樹は伐採する
- ・枝打ちや剪定などを行い、樹高を低く抑える(収穫など管理が容易になる)
- ・果樹の幹にアタンなどを巻く(木に登りにくくなる)

3 野生動物に餌を与えない

- ・餌にならない作物(トウガラシやサトイモなど)への転作
- ・ゴミや弁当の食べ残しはきちんと持って帰る
- ・観光客への注意喚起(餌付けの禁止など)

●リスクの増加

野生動物に「人里へ下りてくることは割に合わない」ことを教えることで集落への侵入を抑えます。

1 侵入経路や隠れる場所を無くす

- ・農地周辺の下刈りを行う
- ・人工林では枝打ちや下刈りを行う
- ・電気柵や物理柵を使って農地を囲む

2 追い払いや捕獲などを行う

- ・サルは花火やモデルガンなどで追い払う(できるだけ大勢で広範囲を一斉に)
- ・猟銃やわなでの捕獲(⚠ 狩猟免許や許可が必要となり、猟友会に依頼し実施)



上：電気柵 下：花火による追い払い

紹介した鳥獣被害対策は取組の中でも基本的なものです。これらの対策は組み合わせることで2倍、3倍の効果が期待できます。また、耕作地と耕作放棄地が集落内に分散している現状も野生動物の侵入を容易にしていると考えられます。耕作地を1か所にまとめることによって電気柵などで囲みやすくなり、追い払いや見回りの労力を軽減できます。

鳥獣被害を防ぐには個人・集落単位による対策が必要で、予算や時間が掛かるものもありますが、無理なくできる範囲で粘り強く継続して実施することが必要です。

知識 ツキノワグマ

ツキノワグマは本州で最大の野生動物で人身被害が発生しやすく、場合によっては命を落としかねないため注意を要する動物です。

●特徴

- ・ 大きさ：体長 110～150cm、体重 80～120kg。
- ・ 全身が黒色で胸に三日月形の白斑
- ・ 聴覚や嗅覚が非常に優れている



●食べ物

食性は植物を中心とした雑食性で季節ごとの餌は以下のようになっています。

春：樹木の新芽・新葉や笹、竹、前年実ったドングリなど

夏：キイチゴ、クワなどの果実類やアリ、ハチなどの昆虫類

秋：ブナ、ミズナラ、コナラ、クルミなどの堅果類や柿やイチヨウ（ギンナン）などの果実類

これら以外に魚や米ぬか、動物の死体、わなに掛かったイノシシなども食べることがあります。また、ハチミツも好物でミツバチの巣を食べるために民家の壁を壊すこともあります。



クマに壊された壁

●生態

広い行動域を持ち、オスでは 30 から 50 平方キロメートル、メスでは 10 から 30 平方キロメートルですが、まれに 100 平方キロメートル以上の行動域を持つものもいます（1 平方キロメートル＝1 反の田んぼ約 1000 枚に相当）。

基本的には夜行性で奥山（下田地域の粟ヶ岳や守門岳など）を中心に生活しており、餌を求めて動き回って生活していると思われます。奥山はブナ林が広がっており、ブナの実が凶作の年はナラ類や栗の実を求めて里山へ下りてきます。

一方、最近では 1 年を通じて里山で暮らすクマも増えているようです。春から夏に目撃されるのはこれらのクマだと考えられます。人里に近い環境で暮らしているため栄養状態が良く、奥山のクマよりも体が大きく警戒心が弱いといわれています。そのため、人間と接触する機会が多く注意が必要です。また、冬は岩穴や樹洞などで冬眠をします。



上：クマが登ったクルミの木

中：クマの糞(柿) 下：クマの糞(クルミ)

●事故を防ぐには

- 山に入るときは鈴など音のするものを身に着ける（クマに自分の存在を知らせます）
- 糞や足跡、クマ棚などクマの痕跡を見つけたら引き返す（民家や農地周辺の場合は市や猟友会へ連絡をお願いします）
- 出会ってしまったら目を離さずゆっくり後ずさりしてその場を離れる（クマは逃げるものを追いかける習性があります）
- 民家や農地周辺の草刈をしっかりとる（クマは藪を移動します）
- 柿や栗など果実の管理をしっかりとる（干し柿なども食べます）
- 早朝・夕暮れは特に注意が必要（クマは夜行性ですが早朝・夕暮れでも活動しています）

知識 ニホンザル

ニホンザルは群れで農地等にやってくるため、一度の食害で農作物を根こそぎ食べてしまいます。下田地域の笠堀、大谷地、塩野淵、名下、北五百川、牛野尾、濁沢、葎谷、遅場、新屋、鹿熊、中浦で群れによる食害が発生しています。

●特徴

- ・ 大きさ 体長：50～60cm、体重：15～20kg 程度
- ・ 背面は褐色～赤褐色、腹面は灰褐色の毛に覆われる
- ・ 顔や尻に毛は無く赤い、尾は短い(10cm 程度)

●生態

昼行性で群れ(市内では 30～50 頭程度)で行動するものと 1 頭から数頭のグループで行動するもの(ハナレザル)がいます。食性は植物食を中心とした雑食性で果実や植物の葉、芽、花、種子のほか昆虫なども食べます。また、冬眠はせず 1 年中餌を求めて動き回ります。

群れはメスを中心にした母系社会で、リーダー以外のオスは生後 3 年から 8 年ほどで群れを離れてハナレザルになります。基本的に群れ同士の行動域は重ならずお互いに避け合っているようですが、合流することもあります。

数年前から下田地域で農作物の食害が起こるようになり、現在も徐々に活動範囲を広げています。農作物を食害する群れは栄養状態が良いため、野生の群れよりも個体数が増加しやすくなります。基本的に人間の食べるものはほとんど食べると考えられ、しかしサトイモやトウガラシなどは避けているようです。

●サルによる食害を防ぐには **【見かけたらとにかく追い払う】**

サルを集落や農地に近づけないためには、前述の対策を根気強く継続していかなければなりません。サルは非常に知能の高い動物で、花火や爆音機などにもすぐに慣れてしまいます。それぞれの効果を高めるためにも幾つかの手法を組み合わせることをお勧めします。



⚠ 銃による捕獲について

個体数の増加等により被害が多発する場合は、個体数を調整するため猟友会に依頼してやむを得ず猟銃による捕獲を行うことがあります。この場合、銃器の使用により大きな危険も伴いますので、安全に実施できるよう依頼者側(集落・個人)で農地周辺の下刈りを必ず行っていただきますようお願いいたします。また、このことでサルの農地への侵入をある程度防ぐ効果もあります。

藪に囲まれた状態では、藪に隠れてしまい、すぐ近くにいるにも関わらず発見できず効果が得られませんし、見通しが効かないことで誤射や弾が隠れた岩等に当たり人身事故につながるおそれがありますので、ハンターの負担軽減のためにもご協力をお願いします。